

## 浄土教思想の諸問題（Ⅱ）

——特に念仏思想に関連して——

土 屋 松 栄

今回は、特に念仏思想に関連して、検討を試みたい。この念仏実践の思想は、本来、極楽浄土への往生のための中心的実践思想であるのみならず、実にこの念仏こそ阿弥陀仏の浄土教思想そのものを成立・発展せしめた根本的、究極的な原理としての実践思想でもあったと理解されうる。

しかれば、まず〈阿弥陀経〉の修因段、および〈無量寿経〉の三輩往生段における念仏思想に注目して、その説示内容をいまはサンスクリット本（0本・足利本）により要約してみよう。

〈阿弥陀経〉 修因段（Oxford ed., p.96）

もろもろの衆生はかの仏国土に対して誓願をなすべきであり、〔その場合〕僅かな善根によっては、アミターユス如来の仏国土に往生しない。また如何なる善男子や善女人も、アミターユス如来の名号を聞いて思念（manasi-*v*/kr）するに、一日ないし七日、散乱しない心にて思念するならば、彼らが命終のときにアミターユス如来が声聞衆に囲にされ、菩薩衆に恭敬されて前立するであろう。〔その如来を見ることで〕顛倒しない心にて命終し、実にアミターユス如来の仏国土たる極楽世界に往生しよう。

〈無量寿経〉 三輩往生段（Ashikaga ed., pp.42-43）

如何なる衆生も、かの如来を形相において繰返し思念（manasi-*v*/kr）して、多くの善根を植え、発菩提心してかの世界に往生したいと願うであろうならば、彼らの臨終のときに、アミターバ如来が如くの比丘衆に圍繞・恭敬されて住立するであろう。彼らはその世尊〔アミターバ如来〕を見（*v*/drś）るに、清浄なる心になって、まさに極楽世界に往生する。かくして、如何にすれば現世にアミターバ如来を見（*v*/par）ることができようかと希求するところの善男子・善女人は、阿耨菩提に発心した願生して善根回向すべきである。（上輩）

〔以上のようにできない者たちでもかの仏国土に心を致せば、アミターバ如来と全く同様な仏化が、彼らの命終のときに前立するであろう。そこで彼らは、見仏・浄信に基づく三昧（tathāgata-darśana-prasādalambanena-samādhi）に

よって、憶念(smr̥ti)を忘れず、命終し、実にかの仏国土に來生するであろう。  
(中輩)

さらに如何なる衆生であっても、十念生起して如來を憶念(sam-anu-ī/smr̥)し、かの仏国土に対して願望を生じたり、ないし一念生起するだけでも如來を思念(manasi-ī/kṛ)し、願生すれば、彼らもまた夢中にてアミターバ如來を見(ī/dr̥s)るであろうし、極樂世界に往生して、阿耨菩提より退轉しない者となるろう。(下輩)

全体共通して重要なことは、念仏(思念・憶念)と見仏思想(臨終來迎・臨終見仏・見仏三昧・夢中見仏)とが、密接なる関連性を有するものとして説示されていることである。但し、厳密に言えば、〈阿彌陀經〉には見仏を説かないが、しかし臨終來迎の思想というのは、内容的には見仏思想の一種であると考えてよからう。このような念仏思想の先驅となる思想は、やはり〈般舟三昧經〉の所説たる阿彌陀仏中心の念仏三昧の思想であろう。

〈般舟三昧經〉のサンスクリット本は中央アジアから発見された一部断片しか現存しないし、その内容もいまの問題と直接関係するものではない。故に、ここではチベット訳(デルゲ版)によることにして、さらに漢訳四本をも参照しながら、以下にその念仏三昧なるものの梗概を示そう。

〈般舟三昧經〉1～2章(Nyingma ed., vol. 21, p. 6, 11a-p. 8, 13b)

この現在仏の面前に住すると名づく三昧(de ltar gyi sañs rgyas mñon sum du bshugs pa shes bya bahi tiñ ñe ḥdsin)というのは、出家・在家の四衆が、具戒して一人寂処に趣き坐して、所聞の相により、これより西方百千億土の彼方なる極樂世界に、かの無量壽如來がいま現在も菩薩衆に圍繞・恭敬されて住し説法するのを、散乱しない心にて思念(yid la byed pa)するのである。そのように一ないし七日、散乱しない心にて無量壽如來を思念すれば、七日を過ぎて如來を見(mthoñ ba)るが、もし昼間に見なければ、睡眠時の夢中にかの無量壽如來が現ずる。見仏・聞法して受持し、三昧から出て他のために広説したり、あるいは三昧に住して無量壽如來に往生法について請問し、仏を憶念(rjes su dran pa)すれば往生できることを説かれる。さらに如來の三十二相、五蘊・四大などの不滅なることを説かれ、しかして如來に著せず、また妄想・憶念しないで、所縁にて思念しないで空三昧を得るのが、念仏(sañs rgyas rjes su dran pa)なのである。

以上の如く、この念仏三昧(般舟三昧)は、まさしく念仏と見仏とが表裏一体を

なす三昧行なのであり、かかる念仏三昧の思想から、先に掲げた〈阿弥陀經〉〈無量寿經〉などのような類似思想が派生してきたのではなかろうか。特に七日念仏の箇所では、〈阿弥陀經〉と表現的にも同一であるが、恐らくは〈般舟三昧經〉のそれが若干早く成立したと考えると大過ないであろう。

この般舟三昧 (*pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthita-samādhi*) の思想は、大乘仏教における極めて重要な実践思想である。それはさらに〈小品般若經〉<sup>1)</sup>に *tathāgata-darśano-nāma-samādhi* (羅什訳「見諸仏三昧」) とか *sarvatathāgata-darśi-nāma-samādhi* (支婁迦讖訳「悉見諸仏三昧」) とあり、〈大品般若經〉<sup>2)</sup>に *buddhānusmṛti* (羅什訳「念仏三昧」) とあり、あるいは〈華嚴經十地品〉<sup>3)</sup>に *pratyutpanna-sarvabuddha-saṃmukhāvasthito-nāma-bodhisattva-samādhi* (尸羅達摩訳「現在一切諸仏現前住三摩地」) とか〈入法界品〉<sup>4)</sup>に *buddhānusmṛti-mukha* (覺賢訳「念仏三昧門」) とあるものなどと、ほぼ同一内容の実践ではないかと推測されうる。つまり般舟三昧なるものは大乘菩薩道思想もしくは般若・空思想とも多分に関係しているのである。龍樹の『大智度論』(般舟三昧について三十箇所以上言及する) および『十住毘婆沙論』(「念仏品」など) には、このような般舟三昧と大乘菩薩道思想との密接不可分なる関連性というのが強調されているのであって、さらに鳩摩羅什が慧遠と問答往復している『大乘大義章』にも注目すべき思想内容が認められよう。

要するに般舟三昧の思想なるものは、〈無量寿經〉〈阿弥陀經〉に説示された念仏思想の起源となるものであり、また同時に、それは〈般若經〉〈華嚴經〉など大乘仏教の菩薩道思想における重要な実践思想でもあったと知られる。この般舟三昧の実践とともに、他ならぬ阿弥陀仏の浄土教思想そのものが次第に成立・発展したのであろう。換言すれば、大乘菩薩道思想のなかに般舟三昧の思想が生まれ、その般舟三昧の実践によって、いわゆる極楽浄土の莊嚴とか、念仏往生の思想などが形成されうるに至り、それがやがて集大成されて独立せる阿弥陀仏の浄土教思想へと展開したのであろうと考察せられる。

1) *Aṣṭasahasrikā-prajñāpāramitā*, ed. by P. L. Vaidya, p. 243<sup>9-10</sup>.

2) *Pañcaviṃśatisāhasrikā-prajñāpāramitā*, chap. II, ed. by T. Kimura, p. 96<sup>22</sup>.

3) *Daśabhūmiśvaro-nāma-mahāyānasūtra*, ed. by R. Kondō, p. 179<sup>4</sup>.

4) *Gaṇḍavyūha-sūtra*, ed. by P. L. Vaidya, pp. 49<sup>17-50</sup><sup>10</sup>.

〈キーワード〉 浄土教, 念仏, 般舟三昧

(龍谷大学大学院修了)